

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2013年11月発行～

# ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291

Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

## No.38

発行日 平成 25 年 11 月 30 日  
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会  
編集 相坂政夫



朝夕冷え込む季節になりましたが、会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。前回9月21日の新宿文化センター小ホールでのコンサートには多くの方々にご来場いただき誠にありがとうございました。ヴァイオリン、ハープ、箏の素晴らしいハーモニーをご堪能していただきました。この美しいハーモニーで新しいCD「純正律で奏でる日本の名曲」(仮題)を皆様と共に制作、という企画が進行しております。詳細は決定しだいでご案内申し上げます。

今年最期のコンサートは、12月14日午後6時30分から洗足学園大学構内に今年竣工されました『シルバーマウンテン』にて♪純正律は世界を救う♪【玉木宏樹の世界】を開催いたします。今回は、弦楽四重奏とサクソ四重奏のコラボレーション等の作品です。是非ご来場下さい。

## 第一回オレグクリサ国際コンクールを終えて

洗足音楽大学教授・ヴァイオリニスト  
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表  
水野佐知香

私は10月25日から11月3日までウクライナのリビフ市で開催される、第一回オレグクリサ国際コンクールの審査員として招待されました。オイストラフの一番弟子で、パガニーニコンクールや他のコンクール等で優勝されている「オレグクリサ先生」の名前がついた第一回目である。先生はリビフで3才から18才まで過ごされたようで、勉強されていた音楽院には、若い頃の写真がいっぱい飾られています。音楽院の先生方、生徒さんたち他たくさんのお客様が、詰めかけ、審査員の先生方とミニ公開レッスンをし、オレグクリサ国際コンクールに対しての期待をいっぱいに感じました。

さて、リビフは、古い街並みで15世紀の教会などの建物がそのまま残っていて、補修工事がいろいろなところで行われていました。ちょうど宿場町の役目をしていた街で、リビフ通り、東側から西側に抜けたようである。有名な文豪、彼女がリビフに住んでいたのでよく訪れたり、シゲティ、エチュードで有名なシユラディック、もろもろの音楽家が今回コンクールの行われたホールでコンサートをしていたようです。今回クリサ先生の90歳になられるお母様から貴重な資料をコピーさせていただき、当時のコンサートのプログラムを知ることができました。

オーストリアにも占領されていたこともあり、街並みはウィーンのように言われています。見上げなくてはならないほど高い大きなモニュメントのような像があちこちにあり、特に中心部には街をつくった方の像、マリヤさまの像などありその足元にはあふれんばかりのお花がおかれている。また、おもしろいのは、各建物が全くくっついて建てられているが、それぞれに装飾がほどこされ、窓の数でアパートメントの値段が決まっているそうです。15世紀の古い建物に新しい建物をくっつけて残しているものもあり、新旧が入り混じっている街であると感じました。石畳で車と人はというと車が強い、でもその間をぬって道路を渡らなくてはならない。せっかくの道も両側が駐車場になっていて

細い道になってしまっている。観光地になっていて、ガイドさんが付いて、いたるところで学生や観光客達が説明を受けている。もちろんお土産屋さんも大繁盛！路上の市場には、ウクライナのマトリョウシカがいっぱい。ロシアの顔、模様と違うらしくこだわっているらしい。我が家にはスターリンやチャイコフスキーの大きなマトリョウシカはあるが今回のヒットは、お父さんのマトリョウシカに子供、お母さん家族が入っていたり、お母さんの中におとうさん、娘、あかちゃん、鶏が入っていてこれには笑いました。柄の綺麗な木の独特のお皿(色が美しく花や鳥をデザインされている、作っている有名な村があるらしく、製作者のサインがかいてある)、小物入れ、アイコンなどなど...一枚作るのに2ヶ月かかるというウクライナししゅうのテーブルクロス、ブラウスなどもあり、作り手のおばさんが自ら洗濯物干しのように作品を飾り、狭い場所で刺繍をしながら売っている。ユーロしか持っていないので両替は、と言うと街のスーパーでも両替できるのですが、その市場に両替商のおじさんがいて呼んで来てくれて、その場で両替！何とコンビニエンス！！

コンクールには、モスクワ音楽院、キエフ音楽院、そしてポーランド、フランスのリヨン、ウィーン、地元リビフ音楽院からいらっしゃった世界高名な先生方と一緒に10日間審査をし、私にとってとても有意義な時でした。

コンクールは、第一次予選は、全部無伴奏である。バッハ、パガニーニはもちろんですが、ウクライナの無伴奏の作品も弾かなくてはならず、メロディーにウクライナの歌が入ったり独特のリズムもあり、弾きこなすのに大変なプログラムであるが、見事にほとんどのコンテストメンバーがよく弾いていました。主催国の新しい作曲家の作品を演奏することはすばらしいと思うし、これからの若者たちに弾いていてもらいたい、そして世界の人たちにウクライナの曲を知ってもらいたいとの思いのクリサ先生の気持ちのあらわれでしょう。

世界のコンクールで残っていくためには、音楽的にすばらしくても、音色、音程、解釈等基本的なことが完璧にできていて、文句のつけようのない演奏をすることが絶対条件であると、当たり前のことですが改めて強く感じました。二次予選では大きなソナタと技巧的な作品、本選は、コンチェルトを2曲ですが、1曲はチャイコフスキー、ブラームス、ベートーヴェン等から選び、もう1曲はウクライナのまだ存命中の作曲家スコリックの協奏曲が課題。ロシア人の2位になった男性が1人暗譜をしていたのには驚いた。本選はキエフ国立オーケストラとの共演でしたが、このオーケストラのすばらしいこと...チャイコ

フスキーのヴァイオリン協奏曲を3人聴きましたが、管楽器も凄い！オーボエ、ファゴット、クラリネット等、ソロが出てくる度にうっとり！これぞチャイコフスキー……！指揮者のヴォロディーミル・シレンコが本選の初日が誕生日だったのです。日本では普通、楽屋でハッピーバースデーをメンバーで祝うことがあります。コンテスタントが出てきてからオーケストラ全員でハッピーバースデーに似たお祝いの曲を演奏してまた、主催者がお花のプレゼントがきてしまう！！(例のロシア人の男性の時でしたが彼も一緒に弾いていたのが印象的だったのですが！)コンクールの緊張感が一気にほぐれてよかったのですが、日本では考えられないことでした。

もう一つ！コンサートが18時開演なのにお客様がほとんどいない！10分前ぐらいになるとどこからか集まってきて始まる直前になると、2階席は立ち見になり、消防法なんてなんのその、しかも古〜いホールで2階が落ちないか？と心配するのは私だけ？約束時間に私たち審査員も待つことも多く、ウィーンから来た審査員のChristian ALTENBURGER氏といつも「Wait、Wait」と2人で唱えるようにその時間を過ごしたのが楽しい思い出となっています。クリサ先生はといえば、このウクライナのヒーローで、街を歩いても挨拶をされ、彼のコンサートには彼を一目見よう、聴こうという人たちであふれ、拍手も凄い！彼のヴァイオリンの音色に酔いしれ、最後はみんな立ち上がり拍手！すばらしかったです。コンクールの時も、子供たちをオシャレさせて5.6才の子供から杖をついた老人までのお客様だったことがとても印象的でした。

そして、今回のコンクールの、スポンサーが「ネススル」リビフには有名なチョコレート会社「スウィートチ」という会社があり、最近ネススルと合併をしてこのチョコレートを世界に広めたいと思っているらしい。今回のコンクールでネススルは、TVのコマーシャルの音楽を募集し賞金をだし、コマーシャルの映像に合わせて放映をしていたようです。映像にはヴァイオリンも出てきて「音楽、ヴァイオリンとチョコレート」でチョコレートをもっと宣伝したいようでした。この曲は弦楽四重奏で演奏され、ガラコンサートでもこの曲が演奏されてびっくり！またChristian ALTENBURGER氏と苦笑い！というわけで、楽屋も会場も常にチョコレートが溢れるようにおいてあり、ネススルのコーヒーメーカーと一緒にチョコレート漬けの毎日でした。また、チョコレートファクトリーにも行き、チョコレートの新製品の発表会にも立ち会い、毎日がチョコレート！でも、クリサ先生はもちろん、審査員の先生方、事務所代表のセル

ゲイさん始めよい方たちばかりの中で過ごさせて頂いたことに心より感謝！！！！

さあ、充実した12日間を終えて帰途、朝5時半にホテルを出て7時発の飛行機でリビフを発ち1時間でキエフへ、ここで2時間待ち、ヘルシンキまで2時間の旅、ヘルシンキが明るく感じたのがとても印象的でした。ここで約5時間のトランジット、ムーミンの縫いぐるみを見たり、木をふんだんに使った空港内を楽しみ、久しぶりに聞く日本語にビックリ!! (リビフには、コンテスタントに1人日本の方がいましたが全く日本人がいなく、キエフから来た日本の商社のご家族と泊まっているホテルでお目にかかり、記念写真まで撮ってしまいました。というくらい、10日間日本語をほとんど聞いていなかったのです。もちろん、メールをしたり、電話はしていましたけど!)

フィンエアーに搭乗し約9時間！無事成田に到着。最後の荷物チェックで「これ、お一人の荷物ですか？」と言われ「はい！チョコレートをいっぱいいただいてこのトランク半分チョコレートです」と苦笑！バスに乗り横浜へ。自宅に着きリビフ時間のままの腕時計を見たら5時半。ホテルを出て自宅の玄関までぴったり24時間でした。

また3年後「第二回オレグ クリサ国際コンクール」開催の予定！皆様ご一緒にいきませんか?!?!

## 私のマーラー

純正律音楽研究会 正会員  
弁護士 齋藤昌男

編集者から何か書いてくれと言われた。純正律を扱う冊子だから、純正律の事を書きたいのだが、純正律のことは、どうも良く分からない。ただ私にとって確かな事が一つだけある。玉木先生の特に日本唱歌のヴァイオリンを聞きながら、いくらでも仕事が捗ることである。歌が入ると駄目であるが、ベートーヴェンなど聞いていたら、仕事にならないし、モーツァルトも駄目、玉木先生の日本唱歌のヴァイオリンが決して耳ざわりではない。やはり純正律には何かがある様だ。そこでここでは純正律以外の事を書くので、勘弁願いたい。

今から 15 年以上も前に、私も音楽に関する雑文を書いた事がある。友人の医療法人の理事長が「予知医学」と言う雑誌を発行しており、そこに何かを書けと言う。医療に関係したものでなければならぬと思い、当時は、まだ音楽療法ということとは、あまり言われていなかったもので、音楽療法について書くことにした。当時は、マーラーばかり聞いていたので、まず第 1 回はマーラーについて書く事にした。タイトルは「マーラーの音楽は万病を治す」としてみた。改めてマーラーの交響曲全集を二つも完成させたバーンスタイン指揮のニューヨークフィルのものや、エリア・インバル指揮のものなどマーラーの九の交響曲と交響曲「大地の歌」を聞いて見た。グスタフ・マーラーは 1860 年生れて 1911 年には亡くなっている。何と亡くなったのは第 1 次世界大戦の前である。第 1 次世界大戦前の作曲家の交響曲が、未だに一番多く演奏される交響曲である。マーラーの後には、ヒンデミットとか色々言われているが、マーラーを越えるものは、未だにないらしい。マーラーの経歴で面白いのは、マーラーは作曲家として曲を創作する前に指揮者であったのであり、指揮者として生計を立てていた。そして夏の休暇中に、日曜作家、日曜大工のようにして作曲をしていたのである。またマーラー自身が、「私は三重の意味で故郷を持たなかった。オーストリアにあってはボヘミア生れとして、ドイツにあっては、オーストリア人として、世界にあってはユダヤ人として。」と言っているが如く、マーラーはユダヤ人である。真にコスモポリタンである。マーラーの曲については、皮肉たっぷりのものや、風刺した様なものもあり、それは傑作揃いである。

結局、私の「マーラーの音楽は万病を治す」と言うのは、個々の作品の解説の様になってしまい、何が万病を治すのだと自嘲していたところ、思わぬ人に出くわした。顧問先が毎年東京交響楽団に頼んで、チャリティコンサートをやっているが、チャリティコンサートの後のパーティで東京交響楽団の打楽器の主席奏者に出くわした。「マーラーの音楽は万病を治す」と言ったら、その方は N 響の打楽器の主席奏者の M さんは、自分の子供の病気がマーラーの音楽で治ったと言う。私は直接面識はなかったが、M さんと言えば、音楽の盛んな信州のブラスバンド仲間であり、小諸の人である。M さんの前の N 響の主席打楽器奏者は A さんで、A さんは塩尻の人で、A さんが N 響から芸大教授になった後、M さんが N 響の主席になったと聞いていた。私は打楽器ではなくトロンボーンを吹いていたが、大変なつかしく思った次第である。もう M さんも A さんもとっくに定年であろう。やはりマーラーの交響楽はいいですよ。

## ムッシュ黒木の純正律講座 第 37 時限目

### 平均律普及の思想的背景について(26)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

今回は、日本の現在の科学の行き詰まりが、自然科学的な数値と人文・社会的な数値の扱い方を混同しているところに起因していることを指摘した。つまり、日本では統計学の研究が遅れており、それが現在の日本の低迷の原因であるということだ。統計学とは理系と文系の両方に跨がるセンスが求められる学問であり、結局は日本における理系と文系の分断が深刻な結果をもたらしていると言えるだろう。

そもそも統計学による判断とは、確率に基づいて行なわれる。富士山の標高や水の沸点などの数値と違い立場によって解釈が違うもので、そこで運用される数値は自然科学の絶対的な数値とはなり得ない。ところが日本では、それぞれがそれぞれに都合の良い数値だけを取り上げ、しかもそれがあたかも客観的な絶対値のように扱い自分達の政治的主張を喧伝する傾向がある。様々な国家事業においても、お役人の方々はいろいろな数値を持ち出して予算の増額や減額を決定しようとする。確かに、数値を提示することは、決定に客観的な彩りを与えてくれる。しかし統計学の立場から言えばその客観性は明らかにまやかしのなのである。「統計は嘘をつく」、それは統計学を用いる際に肝に命じておかなければならない文言であるが、それはしばしば忘れられる。結論は最初から決まっていて、数値はそれを補強するためにしか使われない。

そのような統計学の運用に関する拙さが露になってしまったのが、先日の原発事故だったのである。「原発は安全である」という安全神話の基に、都合の良い数値だけを並べ、自分達に不利な数値は無視してしまう、そういう決定のプロセスにがっかりした人間は決して私だけではないだろう。不利な数値もきちんと論証し、ということは事業がもたらすリスクに向き合い、それをきちんと評価した上で事業を推進すべきなのだが、何故かリスクは隠される。もしくは見るに値しない、とされる。そもそもリスクを評価し、統計で判断するには、まず何よりも自分のスタンスをはっきりさせ、自分の主観を最初に打ち出すことこそが必要となるが、残念なことに日本では「客観性」の旗印の下に主観が隠されることが多い。「誰の意見なのか」が明示されず、「みんな言っているよ」に流されていく、とでも言えるだろうか？ 私としては、原発そのもの

この問題もさることながら、そのような議論のプロセスに危機感を感じてしまう。

さて、平均律の話に戻れば、平均律支持者にとって平均律の先進性はあらかじめ前提にされている。彼らに対して「純正律の美しさ」を主張しても聞かれることはない。何故なら、平均律の先進性を前にすれば、そのような美しさなど些細なことに過ぎないからである。次回以降、その平均律の先進性を支える思想的背景について考えてみたい。

## 抱腹絶倒のスタジオワーク

玉木宏樹遺作

私がスタジオプレイヤーだった時の話です。ロック、演歌、タンゴ、ウエスタン等々、どんなジャンルでもいやがらずに面白がって演奏するので大変重宝がられ、日本一のギャラを取っていました。実は私は、ヴァイオリン以外の楽器も随分やらされたことがあります。まだブームになるずっと前に、二胡とか沖縄の三線とかもやりました。私は作曲も沢山やっていましたが、楽器の演奏法をしらないと、効果的な音楽は書けません。そこで誰もいないスタジオで、いろんな楽器を遊び弾きしていました。おかげでヴァイブやグロッケンは得意です。

私が 30 ちょい過ぎの時、NHK の朝の TV 小説「おていちゃん」の音楽を担当した時、録音は週に 1 回やっていたのですが、予算の関係で常時使えるのが 6 人のプレイヤーだけでした。これでは音楽の幅も制限されます。そこで私は指揮をしながらのユーティリティプレイヤーとして、ヴァイブ、グロッケン、ティンパニ、ハープ、ヴァイオリン、ヴィオラ etc をやりました。一番辛かったのは、ハープでした。もちろん私はハープなんて高価な楽器に触ったことはないのです、弾ける訳はありません。しかし足のペダルの組み方さえ分かれば、華々しいグリッサンドくらいはできるだろうと思ったのが、甘かった。ペダルはすぐに分かったし、グリッサンドも好調だと思っている内、ハープの弦の強力な存在感に逆襲されました。何度か弦をかき混ぜていると、指先がヒリヒリする。その内、痛くて痛くてさわるのもイヤになってきましたが、自分でやるという



て NHK から借りた楽器。なんとか本番はこなしましたが、そのあとのソロヴァイオリンは指がヒリついて最悪の結果になりました。

また、こんなこともありました。ある作曲家の CM の仕事でスタジオに呼ばれましたが、ソロではなく、10 人のヴァイオリンの頭、つまりコンサートマスターというわけです。よくあることなので早く終って欲しいなあと思っているのに全然始まらない。譜面もそろっているのにどうしたんだろうと思っていると、指揮者が副調に呼ばれ、何やら話し合い。終ると指揮者は私に向かって、「玉木、お前、グロッケンやれ」「何言ってるんだい、やだよ」、指揮者は、実は私が多少はグロッケンができるなんて全く知らなかったのですが「お前ならやるだろう。実は本職がこの仕事忘れてて家に居て、今からじゃ間に合わないんだ。作曲家は、絶対にグロッケンが要ると言い張るんだ。お前、人助けだと思って、助けてくれ」。そこまで言われちゃ、おっちょこちょいの私のこと、断るわけには行かない。しょうがないなあと言いながらグロッケンの席について譜面を見ると、おったまげました。休みは余りなく、ひっきりなしに 16 分音符が続く。私は、時々「チ〜ン」くらいだろうと思っていたら全くの別世界、まるでグロッケン協奏曲みたいです。これでは作曲家がゴネるのも分かるような気もする。しかし、いい面の皮はワタシ……。16 分音符のミスタッチを心配する以前に、グロッケンは余韻が長いので律儀に 16 分音符を弾くと、必ず音が濁るのです。やっぱり素人だから音が汚いと言われるのはまっぴらなので、私はどの音を省けば破綻なく行くか、懸命に考え、できる限りのことはやりとげました。終ってみると、「さすが〜、玉木」という声がチラホラ。何事もないように終わりましたが、ギャラはヴァイオリン分ですから、本職のプレイヤーの何倍も頂きました。

こんなこともあったせいか、自他共に認めるユーティリティプレイヤーとしても重宝され、ある時なんか来ないファゴット吹きの譜面を見せられて何とかしろ、と言われて、G 線をゆるめてやり遂げたり、いろんな抱腹絶倒のできごとは数えられないほどありましたが、その中でも信じられないシーンを二つ紹介しましょう。

私は 25 くらいの時、渋谷のジャンジャンで自分の弦楽四重奏団を全員エレキ化してバルトークをやったり、三味線と持ち替えて、義太夫まがいをやったりしていましたから、ほんのスコシは、三味線にはなじんでいましたが、安物の犬皮で皮が破れ、捨ててから 10 年以上たった、ある朝のことでした。その日

は珍しく仕事もなく、昨晚の飲みすぎで、二日酔い気味の 11 時くらいに電話がかかってきました。よくつきあいのあるインペク(臨時雇いの人集め業者)の女性マネージャーで、何やら切羽詰まった声で「お玉ちゃん、いた～、よかった。三味線持ってるよね、それ持ってすぐに東芝のスタジオにきて！」と半ば絶叫調で言うのです。「待ってよ、三味線なんて、とっくの昔に捨てちゃったよ」「え～！ちょっと待って」と言っただけと相談の様子。しばらくして「豊文さんと替わるわ」と言っただけで豊文さんが「お玉ちゃんならできるわよ、私の稽古三味線貸すからすぐきて」と、こちらも絶叫調。

ここで豊文さんのことを少し。小唄系では戦前、戦後とても有名だった豊吉さんの一門で、多分芸者上がりだと思います。私と豊文さんとは面白いつきあいをしていました。私の師匠、山本直純のスタジオプレイヤーで来られ、なぜか私は豊文さんに好かれいつも側に座るように言われました。そこで、いやでも三味線という楽器の側面を知ったわけです。ある時、豊文さんから、とんでもない話がきました。話ではなく殆ど命令調です。「お玉ちゃん、私にコードネームを教えて。その後はあなたに三味線を教えるから」。その当時すでに豊文さんは 60 なかば。とても前向きな人でした。その豊文さんから絶叫されては行かないわけにはいきません。二日酔いがさめやらぬまま溜池の東芝レコードのスタジオに参上しました。

豊文さんは大喜びで稽古三味線を押しつける。そして譜面を見て私もびっくり仰天しました。なんとそこには「津軽三味線アドリブ」として、適当なコードネームしか書いてありません。もとより豊文さんがコードネームでアドリブできるわけはありませんが、あくまでお座敷芸の小唄系の人が、門づけの津軽なんてやるはずがない。作曲家はだれ？と訊くと、偏屈で有名な人。しかし、豊文さんと呼んで津軽のアドリブなんていわば「イジメ」以外の何物でもない、などと思いながら、マネージャーに促されてスタジオに入ると、約 30 人くらいのプレイヤーが「玉ちゃん！玉ちゃん！」とスタンディングオベーション。しかし当時は今とは違い、津軽三味線なんて全くマイナーのマイナーでしたから、全く進退きわまりました。私としても、どうやったら津軽風に聞こえるかと頭をひねりましたが、アイデアなんて浮かばない。しかし、スタジオのプレイヤーたちは「玉木なら何とかするだろう」というキツイ視線を浴びせ続け、私は、なんとかそのアドリブの部分をオケでやってくれるように頼み、そのバックに合わせ、津軽ってやたらとポルタメントと装飾音が多かったな、と思いつつ太

棹風に聴こえるように、駒の下に 10 円玉を置き、覚悟をきめて、エイヤッと始めました。何と練習 1 回、本番 2 回で結果は大成功。実は今でも何をやったか覚えていません。でも未だに、その時のシーンを共有したプレイヤーからは今でもその話をされます。火事場の馬鹿力ですね。

二つ目も、そのワカランチンの作曲家の仕事でした。三味線の件から 1 年以上たったある日、例の女性マネージャーから、また血相変えた電話が来ました。「玉ちゃん、チャランゴ持ってる？」「持ってるわけないじゃないか」「ねえ、何とかそれ風になる楽器ないかしら。玉ちゃん、フラットマンドリン、やってるね、それじゃ駄目？」

ここで少し説明を。チャランゴというのは主にペルー辺りで使われている民族楽器で今ではワシントン条約で捕獲禁止になっているアルマジロの胴体に弦を張った楽器で、フレットもあり、使っている音域は約、マンドリンに近いのです。一方のフラットマンドリンですが、これはクラシックマンドリンが丸い胴体をしているのを丸みを取り、平に(つまりフラット)した楽器ですが、演奏の基本は普通のマンドリンと同じで、つまり左手は、ヴァイオリンと同じ、ソレラミ調弦です。私は若い時、サザーンロック系のシールズ・アンド・クロフツという二人組のヴォーカルのデュエットにしびれ、クロフツの弾くフラットマンドリンを購入し、練習しつつ、自分の LP(存在の詩)でも何曲も演奏しました。それを覚えていたマネージャーからの話だったのです。

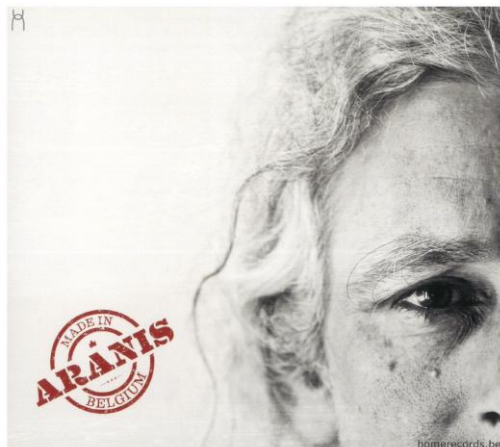
日本人でチャランゴを持っていてちゃんと弾けるプレイヤーは私は、一人だけ知っていますが、多分その人以外にはいないと思います。そんな、いわばレア・アース的な楽器をスコアに書いてしまう作曲家もすごいものです。私は、マネージャーにうまく行かなかったらゴメンね、と言いながら、懐かしの東芝スタジオを訪れました。譜面を見ると、「コンドルは飛んで行く」とか「コーヒールンバ」とか、いわゆるラテン物です。そしてチャランゴ用の譜面を見ると、まさに手抜きのようなコードネームだけです。私は多少チャランゴの調弦法を知っていたから、本物のチャランゴ奏者が来たら、大問題になることは必至です。私はフラットマンドリンで懸命にチャランゴに聴こえるように演奏しましたから、すべて OK でした。しかし終ってからのその作曲家の言葉がすごい。「玉木さんって、本当に不思議な人ですね」。おいおい、お前何だよ、不可能な要求ばかりして迷惑かかっている私に「不思議な人」はないでしょうが。

CD レビュー 純正茶寮  
< Aranis >  
純正律音楽研究会理事 黒木朋興

Aranis made in Bergium

レーベル: Home Records

ASIN: B009OR04Z6



ある日のこと、玉木さんが「これ知ってる？」と一枚のCDを取出した。ジュルベルヌ Julverne の『Le retour du Captain Nemo』ではないか！ 知っているも何も大好物である。以前この覧でも紹介したベルギーの暗黒ロックバンド Univers Zero のバスーン奏者ミシェル・ベルクマンが参加する室内楽のグループだ。ヴァイオリンなどの弦楽器やフルートなどの木管の響きが美しい。「そのうち紹介しましょうか」とは言っただけのもの、結局、現在に至るまで私も玉木さんも紹介せずじまいになっている。

だが、その Julverne を飛び越して今回紹介するのは Aranis である。Univers Zero や Present などベルギーのバンドに触発され結成された若手のバンドであり、活動停止した往年の名バンドというのではなく今現在積極的に活動中であるバンドであるというのがその理由である。また、何より、作編曲を担当しているのがコントラバス奏者のヨリスであるということが大きい。ピアノの和声感覚ではなく、弦楽器のメロディ感覚が際立っていると感じるのは私だけであろうか？ しかもコントラバスがヴァイオリンのような主旋律を担当する楽器ではないことが更に嬉しい。演奏者としての腕もさることながら、オーケストレーションにヨリスの魂が凝縮されているとさえ言えるだろう。

Aranis は、確かに、ピアノ、アコーディオンやギターが入っているので、厳密な意味では純正律音楽とは言えないだろう。だが、そのモード感溢れる編曲の絶妙さと弦楽器のハモリの美しさはここで紹介するに値するバンドである。

この作品は、ベルギー出身の作曲家の楽曲をヨリスがアレンジをしたカバー集であり、彼らのベルギーの先人達へのオマージュとなっている。暗黒ロックが好物である私としては、Univers Zero のダニエル・ドゥニ作曲の「Bulgarian Flying Spirit Dances 2」や Present のロジェ・トリゴール作曲の「Ersatz」が入っているのが嬉しい。特に「Ersatz」の元のヴァージョンが鋭い変拍子の硬派チェンバーロックを代表する名曲だっただけに、ヨリスのアレンジにより優雅に仕上がっていることに思わず驚いてしまった。若い才能がベルギーの地に誕生したことを喜びたい。

なお、Univers Zero や Present はベルギーのフランス語地域のバンドであるのに対し、Aranis はオランダ語地域のバンドであるが、私が先日フランスを訪れヨリスと会談した際にはフランス語を使わせてもらった。流石、多言語地域ベルギーのミュージシャンである。

このアルバムについて、**当会代表 水野佐知香** 曰く、  
まず YouTube の画像を見てこの編成でで?!?!?

アルバム『Aranis 』(2005) より<Kitano>

<http://www.youtube.com/watch?v=eh9K4UzjyC0>

ビックリ!

ヴァイオリン(ヴィオラ)、アコーディオン、ギター、ピアノ、コントラバス、フルート(歌) のグループ!!!

音を聴いてまた ビックリ!!

Artist のテクニックはそれぞれがすばらしい。

その基本の上に自由に音楽をしている。

新しいアルバム『Made in Belgium 』(2012)、これがまたすごい!

いろんな音が聴こえる。オルガンのような、鐘のような、タップダンス、ギンギン etc.こんな音が集まりハーモニーを奏でて音楽ができてしまう!すごい可能性を秘めた演奏である。私はロックには詳しくないが、楽器の弾き方、組み合わせでこんな音楽ができあがってしまう。まさに感動である。ロックのリズムをベースに、素敵な旋律をヴァイオリンが奏でる。ピアノ、アコーディオンが入っているのにオクターブの響きは美しい。ハーモニーが美しい。12 曲入

っているが、どの曲も圧巻である。

NPO 法人純正律研究会の創設者で作曲家、バイオリニストである玉木宏樹氏がよくつぶやいていた。「ヨーロッパのミュージシャンはロックをやっているも美しいハーモニーがあるんだよ！それは「多分教会音楽を小さい頃から親しんでいるからね！」と！

**新連載 !! 玉木宏樹、幻の書籍**  
**「音楽著作権と JASRAC 問題」**  
**その 2**

玉木宏樹遺作

ところで一部にとんでもない誤解があります。それは、JASRAC に入らないと、著作権は認められないとか、JASRAC が著作権の有無を決めている、とかの話ですが、これは全く根拠のないウソツパチです。著作権というのは、著作物が完成したときに、発生するものであり、メディアを通して公表された著作物が商品化されれば、当然、著作権使用料が発生するわけで、このこと自体と JASRAC の存在は関係ありません。現に、JASRAC の会員でない作家(ノンメンバー)は沢山います。ただし個人的にはノンメンバーだとしても、その作品の著作権の管理を代行する音楽出版社の殆どが JASRAC の会員であることが多いので、間接的には JASRAC のお世話になっているとはいええます。もし意地を張って音楽出版社や JASRAC と無関係でいた場合、全国津々浦々での楽曲使用の把握は個人では全く不可能なので、大変なとりっぱぐれにあってしまいます。

さて、日本で楽曲使用にお金が発生するということが浸透したのはいつごろで、JASRAC が設立されたのは何年頃だったのでしょうか。その答えは、1939(昭和 14 年)年なのですが、これは早いんでしょうか、遅いんでしょうか。どちらかは分かりませんが、戦雲が立ちこめてくる頃と考えると、よくやったといえるでしょう。しかし、1939 年に今の JASRAC の前身が設立されるに到ったウラには、NHK を始めとする各種文化団体、作詞家、作曲家、興行団体がひっくり返るような大騒動に巻きこまれました。それが、世にいう「プラーゲ旋風」です。

## \*ヨーロッパに於ける(音楽)著作権の歴史。

ここで、ヨーロッパの歴史をざっと振り返ってみましょう。だいたい著作権というのは copyright で、直訳すれば複製権ですから、大量にコピーする印刷技術の発達に伴って問題となってきた権利なのです。しかし、ここでは日本的な解釈、つまり著作者個有の財産権という側面から見た場合、古代ギリシャ・ローマ時代は、作家はパトロンに仕えて報酬を得、その代価として、作品を社会に公開しており、それがいい作品であれば賞賛を受けるという名誉に浴し、本人たちも納得していたので何も問題は起こりませんでした。

フィールドワークで多大な功績を残された小泉文夫氏によれば、東南アジアのある部落では、声がよく、歌もうまく、作曲もうまい人物は、みんなに認められ、本人以外には許可なく彼の歌を歌えないという決まりにみんな従っているということで、これはお金に換算できませんが、歌の運用としては十分な著作権行使といえるでしょう。

作家と社会の蜜月時代のギリシャ、ローマ時代から約 1000 年後、詩人の嘆きを初めて訴えたのは、ヴァルター・フォン・デル・フォーゲルヴァイデ(1170～1230)でした。「豊かなる芸術のかたわらに、わたしはかくも貧しく見捨てられ……」。

その後、グーテンベルグの印刷術による大量コピー時代になると、コピーの権利は王族が握りました。そんな中で「聖書」のルター訳は 1534 年、権利を認められました。1619.20 年には、かのルーベンスが国王のもと、国境を越えて、オランダ、フランス、イギリス、スペインで「作者」としての権利を認められましたが、その根拠は「画家=外交官」という立場でした。一方超有名だった作曲家のリュリは「権利」を言い張って入牢させられています。1776 年に、ボーマルシェによって劇作家とオペラ作曲家は同盟を作ったりしているころ、フランス革命とアメリカ独立によって「人権」派が勝利し、遂に 1793 年(モーツァルトの死後 2 年目)、複製権(著作権)は作者のものということが認められました。モーツァルト自身は著作権の意識はうすく、自分のオペラ「後宮よりの逃走」でウィーンの流行芝居の台本を盗用しています。その後の著作権運用の混乱に対して、ヴィクトル・ユーゴーが率先して国際会議を開き、「ベルヌ条約」が結ばれました。1886 年のことです。

このベルヌ条約に日本は何と 1899 年(明治 32 年)に参加しています。しかし、

日本は著作権のことなんて全く理解していなかったのですが、明治政府の懸案事項だった各国の不平等条約改正のために、なかば強制的に参加させられたのです。その後の日本は、著作権の何たるや、を知らしめないまま、第一次世界大戦でうまく立ち回った日本は濡れ手に泡の勝利のおこぼれに預かり、空前の好景気のもと、オペラや、ショウビジネス、レコード等で音楽業界は大忙しでしたが、著作権の考え方は全くなく、ステージで上演される外国曲にも一切、使用料を払っていませんでした。しかし、ベルヌ条約のローマ会議に対応した著作権法改正が行われ、ヨーロッパ音楽の著作権が全面的に保護されることを知った、英、仏、独、伊、オーストリアの 5 ヶ国の著作権管理団体が日本にも代理人を置くことを検討し、長年、日本でドイツ語を教えていて日本語にも強いウィルヘルム・プラーゲ(1888~1969)を起用し、昭和 6 年にプラーゲ機関が発足し、これを機にプラーゲによる大旋風事件が起こります。

昭和 7 年、プラーゲは、カルテル(5 ヶ国連合)の代理人として愛宕山の NHK に乗り込み、NHK から見れば法外な使用料の請求をつきつけます。交渉は難航の末、なんとか契約を結び、昭和 8 年から使用料を払うことに同意します。NHK は以前から、日本の作家たちとは包括契約をしていましたが、年間約 1,500 円、それに対してプラーゲには 7,200 円支払うことを知った大日本作曲家協会は NHK に対するストライキ宣言をしました。しかし、ここにあの有名な山田耕筰氏が実に妙な動きをします。なんと読売新聞夕刊に、協会決議に反対を表明、協会は山田耕筰を除名し、NHK と和解を求め、要求は失敗します。

一方、プラーゲは、NHK に強硬な値上げを要求。NHK はこれを拒否し、昭和 8 年から約 1 年間、外国曲の放送をとりやめましたが、昭和 9 年に妥協しました。プラーゲは NHK だけにとどまらず、精力的にステージを視察します。当時、大人気の松竹少女歌劇団の著作権違反は今では信じられないようなもので、「お蝶夫人の幻想」は「マダム・バタフライ」の無断改編上演、同じく「思い出」は「アルト・ハイデルベルヒ」の無断改編上演として刑事告訴します。

その他の色んな動きに大混乱の事態に内務省が動き出し、作家を招集して、昭和 14 年社団法人大日本音楽著作権協会(現在の JASRAC の前身)が誕生したのです。昭和 15 年、第二次世界大戦が始まり、プラーゲは著作権使用料が送金できなくなり、昭和 16 年に帰国します。

(この大旋風の顛末については、森哲司著「ウィルヘルム・プラーゲ」(河出書房新社)に詳しく記されています。この本は小説仕立てなのでたいへん読み易く、



興味のある方には是非御一読をおすすめ致します。)

プラーゲ帰国のあとは、戦火が拡大し、日本は悲劇の敗戦を向かえるため、もちろん、著作権なんて一顧だにされませんでした。ただし皆さんに注意を促したいのは、大日本音楽著作権協会は決して作詞家、作曲家が創ったのではないということです。というのも元はプラーゲの標的にされた NHK の大騒ぎだったからです。みなさん御存知の今の NHK は特殊法人で、国営ではありません。しかし戦前の NHK は日本を代表する国営放送で大本営発表を垂れ流していたのです。その NHK(つまり日本政府)が創った大日本著作権協会は、戦後もそのまま生き残ったのです。

その雰囲気はそのまま残され、10年か15年くらい前の評議員会での多数の人たちの質問にはのけぞりました。いわく「我々を守って下さい、JASRAC様」です。JASRACが創られた時からの組織は、JASRACの社員は、作曲家、作詞家であり、JASRACの職員は、その社員たちの下で実務を行うだけの存在なのです。本来は、作詞、作曲家たちの評議員会から選ばれた理事会(現在は変更されている)が決定したことを行う実務のための組織の方が、上のはずがありません。所が、若い作家たちは、職員の顔色をうかがい、入会する時も完全に立場が逆転しています。JASRACの内部の実態がこうですから、世間は、JASRACという訳のわからない権力構造が横暴な振舞いで威張っているという風な受け止め方をされても致し方ない状況にあるのです。

#### 今後のスケジュール

2013年12月14日土曜日 18時開場 18時30分開演

#### ♪世界を救う♪【玉木宏樹の世界】

会場：洗足学園大学構内『シルバーマウンテン』

東急田園都市線・大井町線 溝ノ口駅 徒歩6分

川崎市高津区久本2-3-1

出演：水野佐知香(Vn.)、千葉純子(Vn.)、古川原裕二(Va.)、井上雅代(Vc.)

三宅美子(Hp.)、岩本伸一(Sx.)、原博己(Sx.)、有村純親(Sx.)

二宮和弘(Sx.)

入場料：2,000円



おたより募集！

---

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

<http://just-int.com/>

平成 25 年 11 月 30 日 発行責任者：NPO 法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫